



説教要旨「あなたの罪の話をしよう」

使徒言行録2章14～28節

ペンテコステの日に、聖霊を受けたペトロは「ユダヤの方々、またエルサレムに住むすべての人たち」（14説）に語りかけました。それは、イエス様の十字架上の死を目撃した人たちであり、「その男を殺せ」と叫んだ人々であり、ローマの兵士たちのように死刑執行に直接関わった人たちに向けられたメッセージでした。そんな彼らに、『あなたがたがよってたかって殺した「ナザレの人イエスこそ、神から遣わされた方です。」（22節）』と訴えたのです。

教会がイエス・キリストの十字架の死を語ることは、人間の、しかも神様の民とされた者たちの罪を指摘し、断罪する、ということです。それは、この罪を自分の罪として受け止め、自分がイエス様を拒み、十字架につけて殺したということを知らしめるためです。

自分の罪を認めることはとても辛いことです。多くの方は、自分は正しい者でありたいと願うし、そうあろうとして努力します。それは決して悪いことではありません。突然、思い当たる節もないのに、「あなたは罪を犯した」と言われても、簡単に認めることはできないでしょう。さらに言えば、わたしたちはそれを語る側です。ほとんどの場合、相手は拒否反応を示すことでしょう。それが自分に恥ずべき所などないと思っている人であれば尚更です。もしかしたら気まずくなるかもしれない。しかし、「自分が救われて当たり前だ」と少なからず思っている人に、「あなたは神に愛されている」とだけ伝えても「そうだと思っていました」で終わってしまうのです。それでは、主の十字架が何の意味もないものになってしまいます。神様に見捨てられて当然なほどに罪深い私を、神様は見捨てず、その独り子の命を私の罪の代償としてくださった。そこにこそ、神様の計り知れない愛が示されているのです。その罪を、主の十字架を隠したままでは、神様の愛を伝えることなど出来ないのです。

主の死を告げ知らせる。主の十字架を語ることは、非常に困難な道です。しかし、その道の先には大きな喜びがあります。そして、この喜びを隣人と分かち合えたなら、どんなにすばらしいことでしょうか。